

患者さんのご紹介について

原則として15歳中学生までのお子さんが対象になります。

神奈川県立こども医療センターは、紹介・予約制で診療をしています。患者さんをご紹介いただく場合は診療情報提供書（紹介状）をご用意ください。原則として15歳中学生までのお子さんが対象です。

ご紹介・ご予約方法について

地域医療連携室宛てに、診療情報提供書（紹介状）を郵送してください。

（画像 CD がある場合は同封してください）

診療情報提供書（紹介状）が到着後、内容を医師が確認し、受診日を設定させていただきます。

受診日が決まりましたら受診連絡票（受診日のお知らせ）を患者さんご家族と紹介元医療機関へ郵送します。

診療情報提供書の書式は自由ですが、専用ハガキ・封筒もあるのでご利用ください。専用ハガキ・封筒が必要な場合には、お申し付けいただければ、お送りいたします。



詳しくは、ホームページ
をご覧ください。

かながわこども医療ネット

（株）富士通 HumanBridge を利用して、こども医療センター電子カルテ情報をインターネット経由で公開する情報共有システム「かながわこども医療ネット」をご利用いただけます。診療に関わる情報をネットワーク上でリアルタイムに共有して、効率的かつ緊密な小児医療提供体制の実現を目指します。



詳しくは、ホームページ
をご覧ください。

【当センターフォロー中の患者さんの急患受診】

まずは、かかりつけの医療機関、休日急患診療所や夜間急病センター等で受診していただき、必要に応じて**医師から当センター担当医宛に電話でご連絡ください**。医師からの連絡が難しい場合は、患者さんから直接担当医に電話連絡をして下さい。

※ 事前にご連絡をいただけない場合、受診出来ないことがありますので、ご注意ください。

※ 救急外来の診療は担当医ではなく、救急外来担当医が行う場合もあります。

【編集・発行】 地方独立行政法人 神奈川県立病院機構 神奈川県立こども医療センター 地域医療連携室
〒232-8555 神奈川県横浜市南区六ツ川 2-138-4 TEL：045-711-2351（代） FAX：045-710-1933
ホームページ：https://regional-medical-liaison.kcmc.jp/



地方独立行政法人 神奈川県立病院機構
神奈川県立こども医療センター

地域医療連携室だより

2024年6月
VOL.54
登録医療機関数
938件
＜2024.5現在 実数＞

副院長兼看護局長就任のご挨拶

副院長兼看護局長 樋口 美佳



4月1日より、副院長兼看護局長に就任しました樋口美佳と申します。

私は、神奈川県立病院機構の足柄上病院やがんセンター、精神医療センター、そして神奈川県立平塚看護大学校での勤務を経験し、この度こども医療センターに異動してまいりました。小児医療の先駆けとして1970年に全国で2番目に開設された歴史ある当センターに勤務することになり、身の引き締まる思いです。

着任して驚いたことは、昼夜問わず続く緊急患者さんの受け入れ要請です。他の医療機関では診断や治療が困難な子どもさんや、高度・先進医療を必要としている子どもさん、母体あるいはおなかの赤ちゃんにリスクがある妊産婦さんを24時間体制で受け入れています。病棟を回り、様々な病気と共にながらんでいる子どもさん達に触れ、当センターが地域の小児医療の最後の砦になっていることを実感しています。そして、職員は、どんなに緊急入院が重なっても病状に合わせて確実に受け入れようと協力し合っていて、その姿勢からセンターの使命を果たそうとする自覚と責任が伝わります。

一方で、センターには、安心・安全な医療の強化に向けて様々な課題があります。看護局では、今年度の目標に「安心、安全な医療・看護の場を保証する」を掲げています。確かな知識と技術のもとに、ご家族も含めた子どもさんお一人おひとりの最善を共に考え、笑顔と優しさを大切に丸となって取り組みを進めていきます。微力ではありますが誠心誠意尽力していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

着任のごあいさつ

事務局長 中島 秀和



本年4月に神奈川県福祉子どもみらい局からまいりました事務局長の中島です。日頃から当センターが推進する地域医療連携の取組にご理解、ご協力をいただき感謝申し上げます。

こども医療センターは、実は私が幼少期に大変お世話になった病院であり、このたびの着任は身が引き締まる思いです。当時と比べて病院や周囲の環境は大きく変化しており、病気や障害のあるこどもに医療と福祉を一体として提供する小児総合医療・福祉機関としての当院の役割は益々重要となっていると実感しています。

皆様のご期待に応えられるよう、病院の基本理念・基本方針を常に意識しながらこども達の元気と笑顔のために事務局として一層のサービス向上に尽力していきたいと考えていますのでよろしくお願いいたします。

総合診療科の取り組み

総合診療科部長 田上 幸治



2020年春からのコロナ禍の影響は子ども達を取り巻く環境を大きく変えました。学校の休校やリモート授業、様々な学校行事やクラブ活動の制限、食事の時も黙食が勧められました。学校や友人が精神的な基盤となっている年長児には大きな影響がありました。結果的に、心の不調や神経性食思不振症や自殺が増加しました。また、コロナ禍は当院にとっても大きな影響を与えました。「こどものためにみんなで力を合わせてがんばろう」と診療にあたってきたのが当院の特徴でしたが、コロナ禍での行動制限は医療者どうしの顔の見える関係を弱め、当院の特徴が希薄になってきた感じがしていました。

令和3年10月の医療事故の報告を受け、総合診療科では対策を検討しました。これまでも外科系の診療科医師から、内科的な相談の窓口として対応してきましたが、相談窓口では不十分と結論しました。より積極的な患者さまへの介入と対応すべき患者さまへのアクセスの拡大と人材育成を行うこととしました。外科系医師との連携を強化するとともに、看護師などからも直接相談できるようにしました。集中治療科の医師がICUやHCU病棟で診ていた患者さんが一般病棟に移った際、当直医師が勤務を修了する際に集中治療科の医師や当直医からの申し送りを受けることにしました。小児では病状の変化が大きいことが特徴でもあります。病状が急激に悪化することも稀ではありません。そのことを見逃さないためには、このような切れ目のない管理を継続することが必要です。

これからも総合診療科は子ども達の為に尽力していきたいと思います。

検査の安全性を高める

アレルギー科部長 犬尾 千聡



卵アレルギーの治療方針は、卵そのものだけでなく、卵が入っている加工品も含め一切食べないで過ごす完全除去食対応が基本でしたが、現在は必要最小限の除去が推奨され、特定の食品が症状を引き起こさずに摂取できる場合、継続して摂取することが望ましいとされています。

一度卵を食べて症状が起こった場合、再度食べてみる際にはアレルギー反応を誘発する危険性があります。そこで、食物経口負荷試験という食べてアレルギー症状が出るかどうかを確認する検査があります。現在、アレルギー症状を最小限に抑えるために、強く加熱した卵(ベイクドエッグ)を用いるなど検査の安全性を高めています。実際、以前は検査に卵白を用いていたのですが、その際は卵アレルギーの子供たちの検査で33%が反応を示していましたが、ベイクドエッグを用いる方法ではその割合が2.7%に減少しました。これにより、患者様の負担を大幅に軽減しています。

外科と医療安全

外科部長 新開 真人



神奈川県立こども医療センターの外科では、鼠径ヘルニアなどのありふれた小児疾患から一般病院ではみない極めて稀な病気（稀少疾患）や他院では治療困難な難治性疾患まで様々なお子様の外科治療を計700件/年あまり行っております。複数の疾患が重なっているお子様もいらっしゃいます。年齢は出生当日の新生児から成人まで、体重は0.5Kgくらいから100Kg程度まで極めて幅が広いです。つまり患者様お一人お一人がそれぞれspecialなのです。そんな方々の外科治療を個別に安全確実にを行うため、われわれは術前から術後まで一貫して診療を担当するとともに、

1. 外科専門医、小児外科専門医/指導医およびそれをめざす研修医からなる小児に特化した専門的なチームの形成
2. 小児麻酔、小児看護チームとの密な連携、ブリーフィングを含めた相互のチェック体制
3. 術前評価から術後管理は院内の様々な他診療科や多職種の専門家と連携、協同診療
4. 手術部位感染の予防と抗菌薬の適正使用

などを実践しています。予期せぬ事態が発生しないように予防を心がけ、もし発生した場合は早期発見し、迅速に適切に対処することにより不利益が少しでもないように関係者一丸となって努めております。

手術室内の医療安全について

手術室部長兼麻酔科部長 中村 信人

手術室部長兼麻酔科部長の中村です。当院手術室では新生児から青年期、さらには帝王切開術を受ける母体まで幅広い患者さんを対象として年間3400件を超える手術が行われています。また、診療科は多岐にわたり緊急手術が多い事も当手術室の特徴です。

このように多くの患者さんをお引き受けする中で、お一人お一人の手術が安全に終了し無事に病棟にお帰り頂く事は我々スタッフの一番の願いです。手術室内のルールやシステムを構築し、その遵守を徹底する事は患者さんの安全を守る上で必須ですが、残念ながら時にこれらのシステムの盲点を突く想定していない事象が発生します。現状のシステムに問題が見つかった場合に、より安全なシステムを皆で検討し構築していきます。それを繰り返し行ってシステムをブラッシュアップしていく事こそが安全を守る上で非常に重要であると考えています。

スタッフ個人個人の安全に対する願いを集結し、これからもより安全な手術室を目指していく所存です。